ISSN: 2189-793X

Amami Station, International Center for Island Studies, Kagoshima University

とうしょけんぶんしつ

島嶼研分室だより

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室

No. 9
2019 年 9 月

企画紹介・・・

奄美分室移転記念式・記念講演会に参加して

岩井（いわい）　久（ひさし）
（鹿児島大学理事　企画・社会連携担当　奄美群島拠点長）

2019 年 3 月末に国際島嶼教育研究センター奄美分室が、奄美市名瀬柳町から港町の紬会館 6 階に移転したことを記念し、6 月 1 日に、移転見学会および移転記念式･講演会が奄美市で開催された。本学からは、佐野学長、河合センター長、筆者らが出席し、朝山奄美市長をはじめご協力頂いた地元行政の方々とともに、新装となった奄美分室を見学した。その後、奄美観光ホテルで記念式と講演会が行われ、約 70 名の参加者が熱心に耳を傾けた。

奄美大島を訪問するのは 3 ヶ月半ぶりであった。私は、1992 年に初めて訪れてから今日までの 27 年間に年 3 回、合わせて 70 回ほどここに来ている。鹿児島大に 1988 年に着任以来、南西諸島の果樹や特用作物のウイルス病を研究してきたためである。中でも 1990 年ごろから栽培が盛んになってきたパッションフルーツの果実奇形の原因ウイルスの制御は、ライフワークとなった。来島の当初は、旧名瀬市郊外や龍郷町一帯でも調査を行っていたが、近年は栽培の中心が島の南部に移りつつあるため、4 年前からは宇検村の山中の圃場を借りて健全苗を植え付け、病害予防の実証試験を行っている。調査出張が 1 泊 2 日の際には、宇検村に宿泊することが多く、奄美市内の屋仁川通りで黒糖焼酎を飲む機会は減ってきた。その間、奄美分室の活躍は存じ上げていたものの、（法文学部主催の奄美サテライト教室での授業を担当したことはあったが）直接は関わらないまま今日に至っている。この 4 月の理事就任とともに奄美群島拠点長の兼務を拝命し、これまでの非礼をお詫びするとともに、新たな門出に立ち合わせて頂いたことに感謝する次第である。

今回は高宮広土教授による記念講演『奇跡の島々（？）：先史時代の奄美・沖縄諸島』を拝聴し、約 1 万年前まで続いた旧石器時代にヒトが住んでいた奄美・沖縄の特殊性について、考えを新たにした。続いて、奄美分室の研究・活動報告として、藤井琢磨特任助教による『薩南諸島沿岸の知られざる海洋生物多様性』、鈴木真理子研究員による『アマミノクロウサギの繁殖とイエネコによる幼獣捕獲』、鈴木英治特任教授による『薩南諸島の植物相の解明と鹿児島大学の役割』というどれも興味深い成果が披露された。

以前より、奄美分室の活発な活動、つまりレベルの高い出版物や数々のシンポジウム・講演会・観察会などに注目していたが、今回の講演や報告を通して、多くの学術論文により研究成果の海外への発信を怠ることなく行っておられることを再認識し、感服した次第である。これはまさに、奄美群島から世界レベルへの研究展開、すなわち学長が標榜している「地球規模の視野で考え、地域視点で行動するグローカルの視点での研究推進」の実践であり、本分室の活動は、本学の次の第 4 中期計画期間の重点の一つになると考える。全分野横断型で地域と大学が結びつく「奄美キャンパス」の実現に向け、さらなる躍進を期待するものである。

奄美分室移転記念講演会
（2019 年 6 月 1 日）

生物多様性シンポジウム「奄美群島の海と川の生き物たち ～未来に残したい宝物～」の開催を終えて

久米元（くめげん）・山本智子（やまもともこ）
（鹿児島大学水産学部准教授・同教授）

現在、鹿児島大学の全学プロジェクト「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育研究拠点整備」として、奄美群島の生物多様性について重点的な調査研究が行われている。これまでに「奄美群島の生物多様性；その魅力を再発見」、「薩南諸島の外来種」、「奄美の植物と世界自然遺産」のテーマでシンポジウムを開催してきた。その一環として、海と川の生物に焦点を当てたシンポジウム「奄美群島の海と川の生き物たち～未来に残したい宝物～」を開催した。

シンポジウムは2019年2月16日に、奄美市、奄美群島広域事務組合との共催および鹿児島大学国際島嶼教育研究センター、奄美市教育委員会の後援をいただいて、奄美市（AiAi ひろば）で行った。鹿児島大学の6名の研究者から「奄美大島におけるリュウキュウアユの生活史」、「奄美・加計呂麻で出会う干潟の底生生物」、「奄美大島で見つかる多様なサンゴ群集」、「奄美群島の海藻・海草類」、「奄美群島の魚たち」、「奄美群島のエビ・カニ類」についての話題提供があった。

当日はおよそ70名の参加者が集い、研究者を交えて活発な意見交換が行われた。奄美群島の自然の素晴らしさ、豊かさ、貴重さ、希少性について実感していただき、この自然を保全していくことの重要性について参加者の間であらためて共有することができた。地元の皆さんからは、沿岸域の開発に伴う海岸の形状や環境、生物相の変化について具体的な情報が寄せられ、研究者にとっても貴重な知見を得る機会となった。シンポジウムで行ったアンケートからは、世界自然遺産登録に向けた地元の機運の高まりを実感することができた。

このシンポジウムにあわせて3月25日に『奄美群島の水生生物－山から海へ　生き物たちの繋がり－』（南方新社）を出版した。この本はシンポジウムの話題提供者6名を含む18人が共同で執筆し、「南西諸島の生物地理」、「陸水に暮らす生き物たち」、「海辺で暮らす生き物たち」、「海中で暮らす生き物たち」の全四部（245ページ）で構成されている。奄美群島など南西諸島の海や河川に生息する生物について、最新の研究成果とともに紹介されている。

最後に、シンポジウムの開催および本の出版に参加・協力いただいた皆様にこころより感謝いたします。なお、シンポジウム開催と本の出版は文部科学省概算要求「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育研究拠点整備」予算によって進められた。

生物多様性シンポジウム
「奄美群島の海と川の生き物たち
～未来に残したい宝物～」
（2019年2月16日）

薩南諸島における研究の紹介

奄美の在来カンキツ

山本雅史（やまもとまさし） （鹿児島大学農学部教授）

現在奄美群島で栽培の多いカンキツはタンカンとポンカンであるが、これらは明治時代以降に導入されたものである。それ以前からこの地域で栽培されていたものが在来カンキツであり、現在でも小規模園地や庭先に栽培されているものもある。在来カンキツは大きく3種類に区分できる。1. 自生していたもの（シィクワーサー）、2. 海外から導入されたもの（クネンボ、ダイダイ等）、3. 自生種と導入種との雑種（喜界ミカン、ケラジミカン等）である。特に自生種および自生種と導入種との雑種由来種は奄美群島独自の貴重な遺伝資源である。しかし、近年これらは新規病害虫の拡大や優良品種への改植によって減少の一途をたどっている。そのため、その保存や特性解明が急務となっており、私は在来カンキツの研究や保存に取り組んでいる。その結果、DNA レベルでこの地域の在来カンキツの独自性や多様性を解明することができた。また、在来カンキツは健康維持・増進効果のある機能性成分に富むことも示した。

在来カンキツは何世紀にもわたり奄美群島で栽培が続けられ、先人から伝えられた文化的側面も持つ。私の研究が在来カンキツの新たな面を解明し、それが奄美群島における在来カンキツ振興の一助になることを願うばかりである。

喜界島の在来カンキツ「ケラジミカン」

種子島の新第三紀中期中新世の陸生脊椎動物化石の研究

仲谷英夫（なかやひでお）（鹿児島大学理学部地球環境科学科）

2010 年 10 月に鹿児島大学理学部地球環境科学科の卒論生が野外調査を行っている際に、種子島の新第三紀中期中新世（約 1500 万年～1100 万年）の茎永層群の大崎層という地層から陸生哺乳類のサイの化石が見つかった。

最初は、海生哺乳類の化石である海牛類（ジュゴンの仲間）、鰭脚類（アザラシやセイウチの仲間）や、束柱類（現在は絶滅している、当時の日本やアメリカ北西部に生息していたデスモスチルスやパレオパラドキシアの仲間）ではないかと考え現生や化石の海生哺乳類と比較したが、該当するものはなかった。そこで、比較対象を陸生哺乳類の長鼻類（ゾウの仲間）、偶蹄類のイノシシやカバの仲間、奇蹄類のサイの仲間に広げて、詳しく、牙や背骨の形態を検討した。その結果、当時の中国に分布していたサイの仲間が一番近いことが、また、牙の特徴やすり減り方から比較的若いサイの下顎切歯ということもわかった。

この時代（中期中新世）には、マングローブの環境が本州だけでなく、北海道西南部の奥尻島や渡島半島にも広がっていたことが、化石の証拠から知られている。種子島の茎永層群はマングローブのある汽水性の環境を示しているが、このように陸生哺乳類の化石も流れ込んでくるようなところであることが新たに分かった。その後の調査では、これらの地層からスッポンや淡水生のカメ化石も発見されることがわかってきた。

今後も、このような哺乳類などの化石が発見されれば、地層としては残っていない、古い時代のマングローブの後背地の環境が推測できることになるだろう。

サイ化石の牙と背骨が地層中から顔を出している

奄美分室の活動報告（2019 年 3 月～2019 年 8 月）

＜シンポジウム・講演会等＞

・沖縄国際大学南島文化研究所×鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
「奄美大島調査報告講演会」
日時：2019 年 3 月 10 日（日）、奄美市文化センター（第 2 会議場）にて
主催：沖縄国際大学南島文化研究所
共催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
講演：「狩猟採集民の暮らした島」　高宮広土（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）
「考古学からみた琉球列島における農耕のはじまりと島の変化」
宮城弘樹　（沖縄国際大学南島文化研究所/総合文化学部）
「奄美大島の海岸砂――南西諸島の浜辺から」
山川彩子（沖縄国際大学南島文化研究所/経済学部）

沖縄国際大学南島文化研究所は過去数年にわたって奄美大島での調査を実施、その成果報告会が文化センターで開かれた。同じく南西諸島を調査対象としている高宮を含めた 3 名の発表があり、島の自然と歴史に興味のある島民が多数集まった。特に奄美大島の海岸の砂の構成を緻密に調べた発表へは、多くの関心が寄せられた。

奄美大島調査報告講演会
（2019 年 3 月 10 日）

・鹿児島大学奄美群島拠点移転記念式・記念講演会
＜奄美分室見学会＞
日時：2019 年 6 月 1 日（土）14：00–14：30、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室にて
＜移転記念式・記念講演会＞
日時：2019 年 6 月 1 日（土）15：00–17：15、奄美観光ホテル 4 階にて
挨拶：佐野　輝（鹿児島大学学長）
河合　渓（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター長）
祝辞：朝山　毅（奄美市長・奄美群島広域事務組合管理者）
松本俊一（鹿児島県大島支庁長）
記念講演：「奇跡の島々先史時代の奄美群島」　高宮広土（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）
活動報告：「薩南諸島沿岸の知られざる海洋生物多様性」
藤井琢磨（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）
「アマミノクロウサギの繁殖とイエネコによる幼獣捕獲」
鈴木真理子（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）
「薩南諸島の植物相の解明と、鹿児島大学の役割」
鈴木英治（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）
コメント：高梨　修（奄美博物館館長）／　服部正策(東京大学特任研究員)
閉会の挨拶：岩井　久（鹿児島大学理事）

詳しくは 2 ページを参照のこと。

・鹿児島大学奄美群島島めぐり講演会（全 6 回予定）
第 1 回　徳之島
日時：2019 年 4 月 13 日（土）、徳之島町役場第 4 会議室にて
講師：鈴木英治（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）／平　瑞樹（鹿児島大学農学部）
第 2 回　沖永良部島
日時：2019 年 4 月 27 日（土）、和泊町防災センターにて
講師：藤井琢磨（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）／平　瑞樹（鹿児島大学農学部）
第 3 回　喜界島
日時：2019 年 5 月 11 日（土）、喜界町役場トレーニング室にて
講師：宮本旬子（鹿児島大学理工学研究科）／井村隆介（鹿児島大学共通教育センター）
第 4 回　龍郷町
日時：2019 年 5 月 25 日（土）、生涯学習センターりゅうがく館多目的室にて
講師：久米　元（鹿児島大学水産学部）／山本雅史（鹿児島大学農学部）
主催：鹿児島大学「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育研究拠点整備」プロジェクト
共催：奄美群島広域事務組合、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター、徳之島町（第 1 回）
後援：奄美自然体験活動推進協議会、喜界町教育委員会（第 3 回）、龍郷町教育委員会（第 4 回）

これまでの研究成果の地域への還元を目的に、5 島 6 か所をめぐる、奄美群島島めぐり講演会を企画した。各島それぞれ熱心な島民が聴講に訪れ、研究者と島の自然や農業、防災について議論を交わしていた。今年度は与論島（10 月）と瀬戸内町（11 月）を予定している。

島めぐり講演会第 3 回 in 喜界島
（2019 年 5 月 11 日）

＜セミナー・観察会等＞

・奄美の生物多様性観察会「奄美群島の植物教室 in 徳之島」
2019 年 5 月 11–12 日（土–日）、伊仙町義名山運動公園と喜念浜海浜公園にて
2019 年 8 月 3–4 日（土–日）、天城町秋利神川周辺林道、三京林道にて
主催：鹿児島大学「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育研究拠点形成」プロジェクト
後援：NPO 法人徳之島虹の会、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
講師：鈴木英治（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）、鈴木真理子（同）

昨年度奄美大島で開催され好評だった植物教室が、今年度は徳之島に場所を移して開催された。徳之島でも熱心な生徒が多数集まり、植物の観察会や授業に参加し、南西諸島の植物の関する知識を深めていた。昨年度と同様全 6 回の教室で、残り 2 回が 10 月に予定されている。

奄美群島の植物教室 in 徳之島
（2019 年 5 月 11 日）

・サンゴ礁サイエンスキャンプ in 喜界島
日時：2019 年 8 月 3 日–14 日、喜界町にて
主催：喜界島サンゴ礁科学研究所
共催：北海道大学・九州大学、サンゴ礁地球環境学研究室
協賛：JAL
後援： 喜界町、喜界町教育委員会、鹿児島県、南海日日新聞社、奄美新聞、日本サンゴ礁学会、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター、奄美海洋生物研究会、奄美群島広域事務組合、喜界島観光物産協会、あまみエフエム　ディ！ウェイヴ、関西喜界町郷友会、東京喜界会、鹿児島喜界会

5 年目となるサンゴ礁サイエンスキャンプに、後援および講師として当センターの藤井特任助教が参加した。回を追うごとに増える小中高生参加者は 50 名以上に及び、初めて目にするサンゴ礁の自然体験から質の高い調査研究まで、参加者にとっては貴重な体験学習となった。

・研究報告会
日時：2019 年 7 月 7 日（日）、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室にて
主催：東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻人類生物学・遺伝学研究室
後援：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
報告：「奄美大島・喜界島のヒトの遺伝的系譜」西川有理（東京大学大学院理学系研究科）

奄美群島を対象に研究を行っている東京大学大学院生の研究報告会が奄美分室で行われた。これまで南西諸島のヒト遺伝に関する研究は沖縄のデータで代表されてきたが、初めて奄美のヒトの遺伝的構成を明らかにした発表に、多くの人が関心を寄せた報告会となった。

・奄美こども環境調査隊事前学習「サンゴ礁」
日時：2019 年 7 月 6 日（土）、奄美市大浜海岸および奄美海洋展示館にて
主催：奄美市教育委員会・南海日日新聞
講師：藤井琢磨（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

奄美市の小中学生が沖縄訪問を前に、奄美大島の海洋生物の豊かさと人間社会との関わりを学んだ。生憎の天気で自然観察は叶わなかったが、奄美展示館で飼育されている生物観察を楽しんだ。

・奄美分室で語りましょう（島嶼研勉強会）
第 25 回：2019 年 5 月 31 日（金）、瀬戸内町立図書館・郷土館 2F　視聴覚室にて
話題：海の小さな生き物たちのはなし in 瀬戸内町
「歩くサンゴの話」藤井琢磨（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）
「温泉に浸かるカニの話」小松浩典（国立科学博物館）
「貝ではない貝のなかまの話」斎藤　寛（国立科学博物館）
第 26 回：2019 年 6 月 10 日（月）、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室
話題：「奄美群島の森林の特徴について」相場慎一郎（鹿児島大学理工学研究科）

不定期開催で、研究者や一般市民が飲み物片手に肩肘張らずに集い語らい、教養を深める場として開催している小規模勉強会、「奄美分室で語りましょう」。2019 年度上半期は、瀬戸内町での出張ミニ講演会や奄美群島の森林に関する最新の研究成果などがあり、自然に興味のある多くの島民が参加し、様々な質問が寄せられていた。

奄美分室で語りましょう in 瀬戸内町
（2019 年 5 月 31 日）

・島嶼研研究会ネット中継会
島嶼研郡元キャンパスで定期開催される研究会のインターネット中継を行っている。2019 年 3 月から 2019 年 8 月の間に計 5 回開催された。

＜奄美分室来訪者数＞
のべ 191 名（2019 年 3 月 1 日–2019 年 8 月 31 日）

～学生島体験！vol.9～
「島の歴史を発掘する」

中尾綾那（なかおあやな）　（鹿児島大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程二年）

「これはもしかして…」あの時の興奮は未だに忘れられない。

昨年度参加した奄美大島の半川（はんごー）遺跡の発掘調査でのことだ。土器などとともに出土したのは炭化したドングリだった。この炭化したドングリは、2005 年の半川遺跡の調査でも発見されており、昨年（2017 年）、年代測定の結果、約 1 万 1200 年前のものと報告され、「琉球列島で最古の植物遺体」として新聞などに大きく取り上げられた。この今回の発見が再び奄美の新たな歴史を解明する一助となると考えると、継続した調査・研究の重要さを改めて感じた瞬間でもあった。

半川遺跡での発掘調査の様子
（写真：新里貴之氏提供）

私は考古学を専攻し、これまで奄美大島に限らず、トカラ列島や徳之島などといった多くの島での発掘調査に従事してきた。学部生の頃から国内外で約 20 回の発掘調査に参加しているが、その度に新しいことの発見で心が躍る。もちろん発掘調査では泥まみれになり、地道な作業から土木作業のような力仕事まであるため体力をとても使う。身なりなど気にしている暇はいない。しかし、その地域や島の歴史を知る手がかりを探すことができているという特別感や土器や石器を取り上げる時のわくわくした気持ちに勝るものはない。

そして島での調査は、その土地の自然環境を肌で感じ、郷土料理を食べ、島の人々と交流することでそれぞれの島の文化を知ることもできる。だからこそ船に何時間揺られてでも行きたくなる。まだまだ島の歴史はわかっていないことが多いが、これから発掘調査や研究が進むごとに島に住んでいた昔の人々がどのような環境下で生きてきたのか、次々と解明されていくだろう。過去の人々に想いを馳せながら今後も研究を続けていきたい。

お知らせ

2019 年 7 月 12 日をもって、当センターのプロジェクト研究員であった鈴木真理子が一身上の都合により退職しました。同 9 月 3 日より宋　多情（ソン　ダジョン）が後任のプロジェクト研究員を務めます。今後とも、当奄美分室および国際島嶼教育研究センターへの益々のご支援のほど、お願い申し上げます。

編集後記

分室の活動の多くを担ってきたプロジェクトも今年度が最終年度。次年度は世界遺産登録の再審査もあり、奄美も分室も、変革の年になりそうです。

藤井琢磨

島嶼研分室だより No. 9

令和元年 9 月 25 日発行
鹿児島大学
国際島嶼教育研究センター奄美分室
〒894-0026
鹿児島県奄美市名瀬港町 15-1 奄美群島大島紬会館 6 階
TEL: 0997-69-4852　FAX: 0997-69-4853
E-MAIL: amamist@cpi.kagoshima-u.ac.jp
http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/AmamiStation/

表紙写真：移転後の奄美分室から望む、奄美まつりの花火。
（撮影：2019 年 8 月 2 日、藤井琢磨）